

## 大学と学校現場との連携に関する調査研究

### —アンケート調査からの考察—

山根 文男<sup>\*1</sup> 木多 功彦<sup>\*2</sup>

学校現場と大学の連携協力をより充実させていくために、「学校現場が大学や大学教員に期待している事は何か」など現場の生の声を把握することを目的としてアンケート調査を実施し、回答についての分析・考察を行った。調査対象は、平成21年度に「いきいき学校づくり」事業に指定された岡山市内9中学校区の幼稚園・小学校・中学校49校の校長と研究主任（幼稚園は主任）とした。その結果、大学教員に対しては「授業づくり」「教科・領域の専門性」「生徒指導・教育相談」等について、学校現場の実態を踏まえた具体的な指導・助言を期待していることが明らかになった。大学生・大学院生（以下大学生等）に対しては「個別の幼児・児童・生徒」「教科指導」等についての支援を学校現場が期待していることが明らかになった。また大学生等が支援に入る際には、継続して参加すること、各学校現場及び幼児・児童・生徒の実態を把握すること、積極的に関わっていくこと等の姿勢が重要であることが示された。

キーワード：大学との連携協力、大学に対する期待、学校現場の実態

※1 山根文男（岡山大学教師教育開発センター）

※2 木多功彦（旧岡山大学教育実践総合センター）

#### I. はじめに

昨今の学校現場は、いじめ、不登校など生徒指導上の課題や学力に関する課題さらに保護者対応など様々な課題が山積しており、その多岐にわたる課題解決等に向けて頑張っている。しかしながら、教員は、日々の対応に追われ時間的・精神的な「ゆとり」がなくなっており、校内研修の時間も、十分確保しにくく、学校現場で、現職教員を育てるという意識も低下していることは否めない。このような学校現場の状況に鑑み、現職教員の資質・能力の向上に向けて、大学と学校現場、教育行政が一体的に連携・協働して取り組むことがより強く求められるようになってきた。

岡山大学教育学部・岡山大学大学院教育学研究科（以下、岡山大学教育学部）と岡山市教育委員会は、平成21年3月に、教員の資質・能力の向上等の課題に対応するため、相互協力して双方の教育の充実・発展に寄与する事を目的に連携協力協定を締結した。平成21年度の連携協力事業の概要は以下の通りである。<sup>1)</sup>

##### ①市教委が実施する事業への連携協力

- ・教職員に対する研修の内容に係わる企画会議への大学教員の参画
- ・教職員に対する研修への大学教員の講師派遣

・「授業で変わる！いきいき岡山っ子育成事業」（以下、「いきいき学校づくり」事業）への大学教員の参画

・「学力・授業力アップ支援事業」の部会への大学教員の参画

・教育相談室・適応指導教室での学生ボランティアによる指導補助

##### ②学校現場への連携協力

・「習熟度別サポート事業」への大学院生（免許保有者）の任用

・特別支援教育充実のための学生ボランティアによる生活補助

・情報教育充実のための学生ボランティアによる指導補助

・日本語指導の必要な外国人児童・生徒への学生ボランティアによる教科学習支援

##### ③大学の教員養成への連携協力

・協力校における教職大学院生の実習

・現職教員等による教員養成への協力

・教職希望学生の市立学校における学校教員インターンシップ事業

・教育実習の受け入れ

##### ④その他

## II. 問題の所在

岡山大学教育学部と岡山市教育委員会の連携協力事業については初年度を終えたばかりであり、連携の目的である「双方の教育の充実・発展」につながるような詳細な成果と課題の検証までには至っていない。しかし初年度の取り組みに対する振り返りの中で、大学側として看過できない点が明らかになった。

連携協力事業の1つである「いきいき学校園づくり」事業とは、大学教員と教育委員会指導主事が連携しながら、中学校区で取り組むべき改善策を提供・検証するものである。平成21年度は9中学校区に9名の大学教員が訪問し、指導・助言を行った。

事後のアンケート調査等では、大学教員の指導・助言について、「自校園の保育・授業の改善に向けて、これまでにない視点がいただけた」という好意的な評価が多く見られた。しかし図1に示した通り、約25%の学校園において、大学教員の指導・助言が「あまり参考にはならなかった」と回答している設問もあった。

そこで本研究では、学校園現場と大学の連携協力をより充実させていくために、「学校園現場が大学や大学教員に期待している事は何か」など現場の生の声を把握することを目的としてアンケート調査を実施し、回答についての分析・考察を行った。

## III. 方法

### 1. 調査対象及び調査方法

平成21年度に「いきいき学校園づくり」事業に指定された岡山市内中学校区の幼稚園・小学校・中学校49校園を対象として、各学校園の校長と研究主

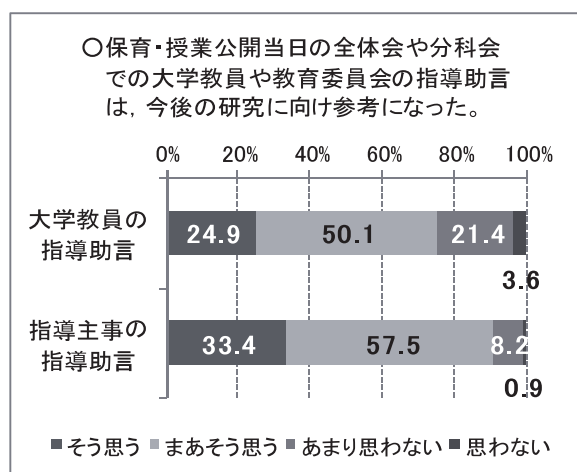


図1 「いきいき学校園づくり」事業での事後アンケート(一部)  
(平成22年2月8日現在)

表1 調査用紙の送付数と回収数・回収率

学校種	送付数	回収数	回収率
幼稚園	17	16	94.1%
小学校	23	21	91.3%
中学校	9	8	88.9%
全体	49	45	91.8%

任(幼稚園は主任)に、同一のアンケート調査を行った。調査用紙は、平成22年10月1日付で対象学校園に送付し、提出期日は10月15日までとした。なお、調査項目等の内容については、事前に岡山市教育委員会指導課及び校長会の役員にも確認、了解をいただいた。

### 2. 調査内容と質問項目

平成21年度の「いきいき学校園づくり」における取り組み及び事後アンケートの質問項目等を参考にしながら、学校園現場が必要としている指導・助言及び支援に関する選択肢を作成した。回答は、連携に期待する項目を以下に示したア～ケの選択肢の中から3つ選択するよう求めた。

この他、大学教員及び大学生等に配慮して欲しい事項等を自由記述する質問を設けた。

#### 【大学教員に期待すること】

- ア：学校(園)経営・学校(園)運営に関する指導・助言(学校種間連携、教育課程、学習評価、教職員評価など)
- イ：授業(教育活動)づくりに係る研修に関する指導・助言
- ウ：教科・領域の専門性に係る研修に関する指導・助言
- エ：生徒(園児)指導・教育相談に関する指導・助言
- オ：その他

#### 【大学生等に期待すること】

- カ：教科指導(教育活動)への支援
- キ：個別の幼児・児童・生徒への支援
- ク：校(園)務(校園内環境整備・学校園安全など)への支援
- ケ：その他

## IV. 結果と考察

### 1. 回答者の内訳

調査用紙の回収数は90(45校)であり、回収率は91.8%であった。内訳は表1の通りである。すべて

の学校園において校長・主任両者の回答があった。

## 2. 大学との連携で期待すること（全体概要）

選択肢に対する回答を集計したものが図2である。選択肢のア～オは大学教員に期待することであるが、回答数が最も多かったものは「イ：授業づくりに関する指導・助言」であった。また、選択肢カ～ケは大学生等による支援を期待するものであるが、回答数が最も多かったものは「キ：個別の幼児児童生徒への支援」であった。

「オ：その他」に書かれていた内容は、特別支援教育に関する内容（3件）、学校園内研修に関する内容（3件）、保護者対応に関する内容（1件）、放課後の個別学習及び部活動の指導に関する内容（1件）であった。「ケ：その他」に書かれていた内容は、大学生等の指導技術・能力の向上等を求める内容（3件）、子どもたちの安全に関する内容（1件）、部活動の指導に関する内容（1件）、放課後の子どもの居場所づくりに関する内容（1件）であった。

回答を「大学教員に期待すること（選択肢ア～オ）」と「大学生等による支援を期待すること（選択肢カ～ケ）」に分けて集計したものが図3である。この結果から、学校園は、大学教員による専門的な立場からの指導・助言だけでなく、マンパワーとして多くの大学生等が学校園に来て教育活動を支援してくれることを期待していることが明らかになった。

## 3. 学校種間の比較

幼稚園・小学校・中学校の学校種別に回答を集計したものが図4である。

幼稚園では、大学教員に期待することとして回答比率が最も高かったものは「ウ：教科・領域の専門性に関する指導・助言」であった。また、小・中学校に比べて「ア：学校経営・運営に関する指導・助言」の回答比率が高かった。これは「幼保一体化」や「子

ども園構想」など、就学前教育の流れ等が影響しているものと考えられる。大学生等に期待することとして、回答比率が最も高かったものは「キ：個別の幼児・児童・生徒への支援」であった。また、小・中学校に比べて「ク：校務への支援」の回答比率が高かった。幼稚園では小・中学校よりも大学生等に依頼しやすい校務（教材・遊具の準備や片付けなど）が多いことが理由として考えられる。

小学校・中学校ともに大学教員に期待することとして回答比率が最も高かったものは「イ：授業づくりに関する指導・助言」であった。

小学校では、他の学校種に比べて「エ：生徒指導・教育相談に関する指導・助言」の回答比率が高かった。いじめや暴力行為等、児童・生徒の問題行動の低年齢化により、小学校の先生が対処すべき事案が増大かつ深刻化・複雑化している。<sup>2)</sup> これらの問題に対して適切な指導・助言を求めている状況が推察される。

大学生等に期待することとして、小学校で回答比率が最も高かったものは「キ：個別の幼児児童生徒への支援」であった。中学校では「カ：教科指導への支援」と「キ：個別の幼児・児童・生徒への支援」が同数であった。特別な支援を必要とする児童・生徒が増えている<sup>3)</sup> 一方で、教科指導や生徒指導だけでなく、保護者との対応、事務処理等の増大により、小・中学校の先生の仕事量は増加の一途を辿っている。<sup>4)</sup> 学校支援ボランティアをはじめとした大学生等による学校園現場に対する支援の充実は、今後ますます重要になってくる。

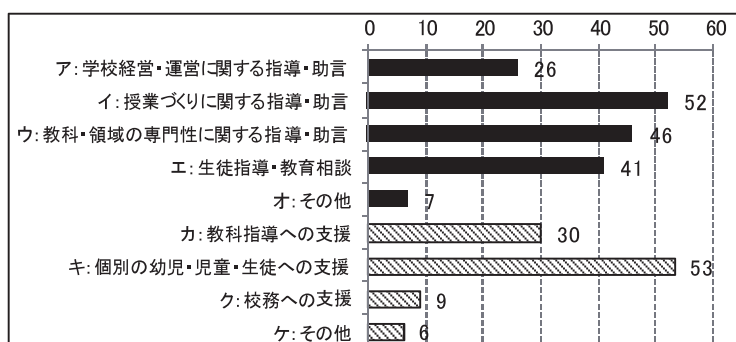


図2 全体の集計結果

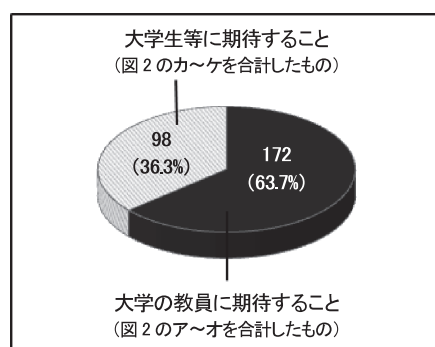


図3 対象別の集計結果

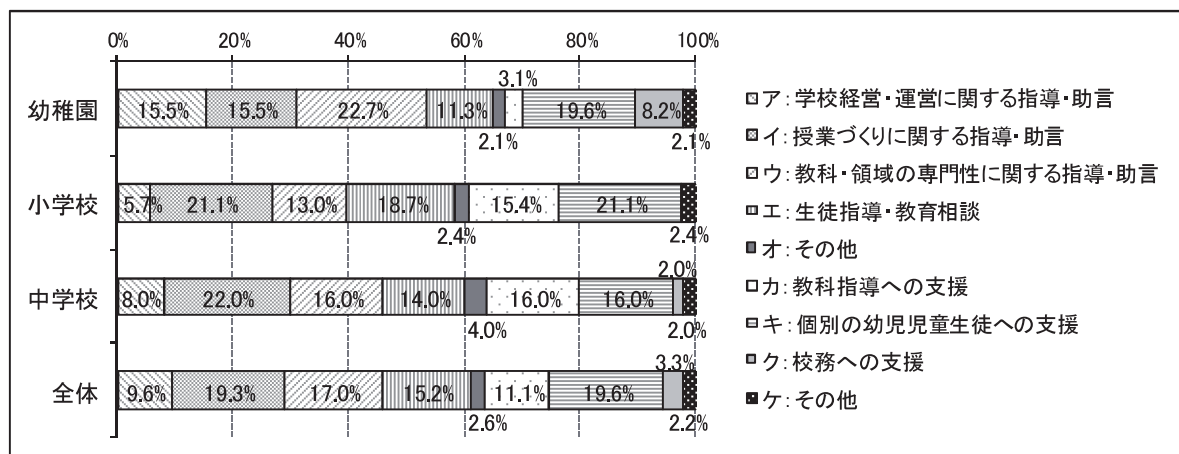


図4 学校種別の集計結果

#### 4. 職種間の比較

回答者の職種別（校園長または主任）の集計結果を示したものが図5である。

大学教員に期待することについて、校園長の回答比率が高かったものは「ウ：教科・領域の専門性に関する指導・助言」「ア：学校経営・運営に関する指導・助言」「イ：授業づくりに関する指導・助言」の順番であった。一方、研究主任（幼稚園は主任）の回答比率が高かったものは「イ：授業づくりに関する指導・助言」「ウ：教科・領域の専門性に関する指導・助言」「エ：生徒指導・教育相談」の順番であった。

大学生等に期待することとして、校園長の回答比率が高かったものは「キ：個別の幼児・児童・生徒への支援」「ク：校務への支援」の順番であった。研究主任（幼稚園は主任）の回答では「カ：教科指導への支援」と「キ：個別の幼児児童生徒への支援」が同数であった。同じ指導的立場にある校園長と研究主任（幼稚園は主任）であっても、それぞれの役割の違いによって、大学との連携に期待するものが異なっていることが明らかになった。

#### 5. 自由記述の分析・考察

##### (1) 大学教員の指導・助言に求めること

「指導・助言にあたって大学の教員に配慮してほしいこと、お願いしたいことがあればお書き下さい。」という自由記述の質問に対して、90名中76名から回答があった。このうち、質問の意図と異なる内容（謝辞等）が書かれていた2名の回答を除いた74名の回答を分析の対象とした。（回答率：82.2%）

出現回数が多かったキーワードを集計した結果が表2である。なお、回答中に異なる複数のキーワー

ドが含まれていた場合、それぞれを1回として集計した。また同一文中に複数回出現したキーワードは、1回として集計した。

最も多く使用されたキーワードは「現場」であった。このほか、「実態」「具体的」「実情」「実際」「様子」「把握」などのキーワードも多く使用されており、学校園の先生方は現場の実態を踏まえた具体的な指導・助言を期待していることが明らかになった。これらのキーワードが含まれていた主な回答は以下の通りである。

- 実際の幼児の実態に即した具体的な保育内容や現場の実情に合った保育内容に対する指導・助言をしていただきたい。【幼稚園・主任】
- 現場の実態を知っていただいた上での具体的な内容でお願いしたい。一般的なことは今までの研修会で学ぶことができる。細かい部分での助言が若い人・保護者等に必要。専門的な立場で一人一人の実情に合わせる対応が今、一番必要とされている園側の現状です。【幼稚園・園長】
- 現在、教育現場の置かれている現状や家庭の実態等、教育を取り巻く問題を踏まえて指導・助言をいただければと思います。正しいと分かっていること、した方がよいと知っていることも、実際には時間的な制約等でなかなかできないことも多いように思います。また、やるべきことが多く、限界に近い状況の中で、どうそれをやりくりこなしていくかということも含めてご指導いただければと思います。【小学校・研究主任】

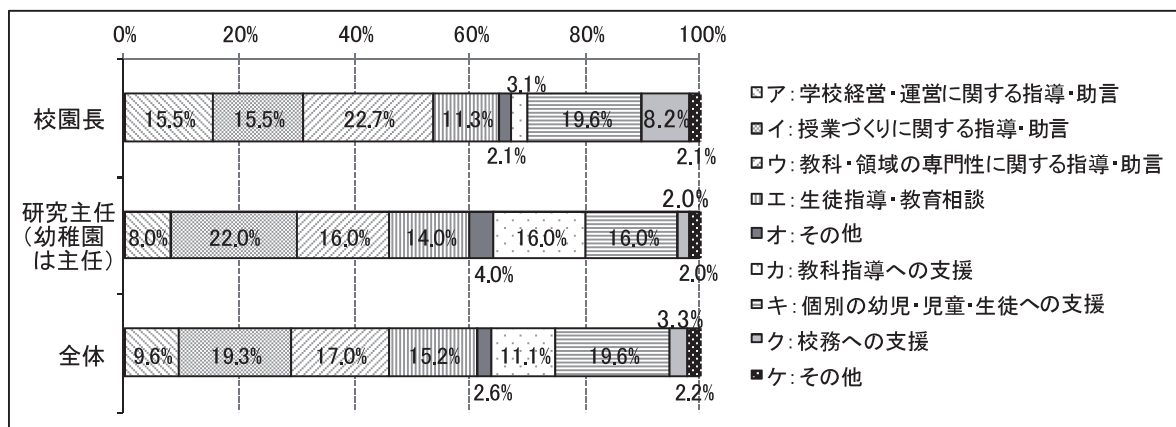


図5 職種別の集計結果

表2 抽出したキーワード(大学教員に配慮してほしいこと)

抽出語	出現数	出現率
現場	18	24.3%
実態	17	23.0%
具体的	10	13.5%
専門	10	13.5%
実践	8	10.8%
実情	7	9.5%
継続	6	8.1%
実際	6	8.1%
把握	6	8.1%
様子	6	8.1%
理論	6	8.1%
研修	5	6.8%
有効回答数	74	

表3 抽出したキーワード(大学生等に配慮してほしいこと)

抽出語	出現数	出現率
継続	14	19.7%
理解・把握	13	18.3%
現場	11	15.5%
積極的・積極性	9	12.7%
教職	9	12.7%
守秘・秘密	8	11.3%
コミュニケーション・関わり	6	8.5%
特別支援	6	8.5%
定期的	6	8.5%
言葉・言動	5	7.0%
実態	5	7.0%
時間	5	7.0%
有効回答数	71	

\*出現率は、出現数を有効回答数で割ったもの

- 一般的に、現場の現状をまずふまえて、“学校教育”がどのようになっているのか、どこに問題があるのか、大局的な視点をベースにして、それぞれの学校の課題に答えてくださるとありがたい。例えば、16時30分まで子どもと向き合い、勤務時間の30分の中で「どうやって研究に取り組めるか」ということ。実際には20時近くまで働くというモチベーションの下がった中で研究をやることは大変です。是非、現場の実情に応じた示唆が欲しいと思います。【小学校・校長】
- 各学校、その年により、状態が大きく異なるため、その実態を把握していただいて、理想的なこと、現状対策的なこと、なるほどと思える指導・助言をいただくと充実したものになります。【中学校・研究主任】

- 本校の学習面、生活面の実態、家庭教育力、地域性を把握した上で指導・助言をお願いできればと思います。【中学校・校長】

また「専門」「理論」「実践」「研修」などのキーワードから、大学教員の専門性を生かした理論的な指導・助言に対する期待も大きいといえる。

- 特別支援の必要な幼児の保護者に対して、幼児理解や発達障害についてのアドバイス等を専門の立場からしていただきたい。(園から教員からだけでなく伝えても我が子の実態について受け入れにくい保護者がいるので、専門の第三者の方からの保護者への助言があればと思う)【幼稚園・主任】
- 現場のニーズに応じて専門的な立場から指導・助言をいただきたい。【幼稚園・園長】

- 現場はとても忙しく「子どもに向き合う時間」「授業準備のための時間」がとても少ない。そんなインプットの少ない中で、自らの力量や資質を向上させる研修の機会を与えていただきたい。また現場で学ぶことは大切であるが、理論に基づいた指導・助言をいただくと、自らの授業などの反省・改善にもなる。【中学校・研究主任】
- どのような場面でどのような方法で指導や支援がしてもらえるのか、事前に現場において十分な打ち合わせが必要であると考えます。元気がでる研修のアイデアや効率的な公開授業後の研修など学校の実態に合ったものを望んでいます。【中学校・校長】

この他、単発的な企画に終わらず、「継続」的な指導・助言を求める回答が複数見られた。

- 園の実態に合わせた指導となるよう、継続した指導をしていただきたい。【幼稚園・園長】
- 具体的な指導・助言をお願いしたい。継続的に（年に数回等）をお願いしたい。【小学校・校長】
- 学校の実情にあったもの。3カ年～5カ年の継続性があるしてほしい。気軽に連絡・調整ができるようにしてほしい。【中学校・校長】

## (2) 大学生等による支援に求めること

「支援にあたって大学生・大学院生に配慮してほしいこと、をお願いしたいことがあればお書き下さい。」という自由記述の質問に対して、90名中71名から回答があった。（回答率：78.8%）

出現回数が多かったキーワードを集計した結果が表3である。集計の方針は「大学教員に配慮してほしいこと」の場合と基本的には同じであるが、類似したキーワードを1つにまとめたものがある点が異なっている。

「継続」「定期的」などのキーワードから、学校園の先生は、同じ人物ができるだけ継続して支援に参加することを期待していることが明らかになった。主な回答は以下の通りである。

- 園の現場をよく知った上で、必要な支援ができると思われるので、しっかり継続してボランティアなどをして、現場の様子を知って欲しいと思う。また、実習生が園に来ているが、実習に来て初めて指導案を書き、大変な思いをしている学生が多い。必要なことを学んでから実習にのぞんでほしいと思います。【幼稚園・主任】

- 保育支援について、幼児との人間関係を築いていただくために、一貫した支援ができるようにするために、できるだけ継続して参加していただければ非常に助かります。【幼稚園・園長】
- できるかぎり継続的に児童の支援にあたるのが、児童にとっても大学生・大学院生にとっても有効であると考えます。そうすることで教員と支援の方向性を共通理解し、力量もついていくのではないかと思います。【小学校・研究主任】
- 継続性のあるかわりをお願いしたい。教職員との意思疎通に努めていただきたい。【小学校・校長】
- 前向きな気持ちを持つ方で、専門的な知識・技能や最新の情報を持つ方が授業では生徒を引きつけます。現場は職員不足の状態、個別支援では継続的に対応して下さる方が望ましい。【中学校・研究主任】
- 継続してほしい（少なくとも一年間）。相互に話し合い（教員と大学生・院生）ができるようにお互い工夫ができるとよい。【中学校・校長】

「理解・把握」「現場」「実態」などのキーワードより、大学生等が参加する学校園や幼児児童生徒の実態を理解・把握して支援にあたるのが求められていることがわかる。特に「特別支援教育」については、事前に学んでおくことが望ましいとする回答が複数見られた。

- 幼児教育に熱意と課題意識をもって欲しい。事前に支援の内容について話し合い理解して欲しい。【幼稚園・園長】
- 個別に幼児を支援する場合、幼児理解を深めた上で幼児と接するようにしてほしい。担任との連携を大事にしてほしい。積極的に子どもたちと触れ合ったり、園での生活の様子を知ったりしてほしい。【幼稚園・主任】
- 学校及び学級経営を理解しての支援の立場をお願いしたい。【小学校・研究主任】
- 特別支援を要する児童が増えています。全体の中で一緒に学習・行動しづらい児童にフォローしていただくと助かります。【小学校・研究主任】
- 特別支援教育を学んだ学生に来てもらい、一人一人に合わせた対応や手助けをしてもらいたい。【小学校・校長】
- 問題を抱える生徒が多く、一斉授業で一人の教員が全生徒を視野に入れ、関わりをもつことは不可能である。特に特別支援を必要とする生徒に対し

て授業中などの補助をしていただきたいが、その授業だけでなく、事前・事後の打ち合わせも必要となってくる。その時間だけでなく長時間、長期間来ていただけると助かる。【中学校・研究主任】

「積極的」「コミュニケーション・関わり」などのキーワードにより、大学生等が幼児・児童・生徒及び担当の先生と十分にコミュニケーションをとること、積極的・主体的に関わっていくことの重要性が示された。

●幼稚園教育の役割の一つに子育て支援があり、未就園児対象のものにも積極的に取り組んでいます。そのような場で、幼児と触れ合うことは学生にとっても学びとなり、幼稚園にとってもありがたいことです。積極的な参加をお願いしたい。

【幼稚園・園長】

●指導する教員の意図に沿った支援をしていただきたいです。児童としっかり話したり遊んだりしながら積極的にコミュニケーションをとって下さるとありがたいです。【小学校・研究主任】

●人間性を高めて欲しい。様々な職種の人と触れ合う機会を作ってほしい。現場体験を積んで、保護者や児童の思いや願いを知ってほしい。ボランティア活動にも積極的に参加し、視野を広めてほしい。【小学校・校長】

「教職」「守秘・秘密」「言葉・言動」「時間」などのキーワードからは、社会人（教育公務員）として必要な最低限度の常識やマナーを、大学生等が身につけておくべきであることが示されている。また、将来の同僚になるかもしれない大学生等に対して、叱咤激励が込められた回答も見受けられた。

●知り得た個人情報ほもらさない（職務上のことも含めて）ようお願いします。教職員と連携しつつ、子どもの課題・実態に応じた支援をお願いするとともに、感じたことや子どもの姿について教えてほしいです。【幼稚園・主任】

●守秘義務、言葉遣い、あいさつ、人間関係（協調性・コミュニケーション）、身だしなみ、表現力など。【幼稚園・園長】

●校内での子どもの様子などについて、外部で話題にしないしてほしい（守秘義務）。児童に対する言葉遣い・接し方（丁寧に公正に）。【小学校・研究主任】

●支援も計画的に行ってこそ効果があるものと思っています。年度の初めに計画を立てるのですが、急に欠席になったり、無断で欠席したり、いつの間に

か止めてしまったり、と現場が混乱することも多くあります。一度支援に入った場合の心構えや責任感をもっていただきたいと思います。発達障害の児童への支援もお願いすることが多くあります。このことに対する知識を少しはもって入って頂けるとスムーズな支援ができます。【小学校・校長】

●自分が将来教職に就いたときのことを、いつもイメージして支援にあたって欲しい。支援を行いながらも、多くの先生方の動き等を観察し、現場の状況を知ると同時に、将来に向けて感性を磨いて欲しい。【小学校・校長】

## V. おわりに

本研究では、学校現場と大学の連携協力をより充実させていくために、現場の生の声を把握することを目的としてアンケート調査を実施し、回答についての分析・考察を行った。今後の課題を次のように考えている。

多くの先生方は、大学教員に対して学校現場の実態を踏まえた、具体的かつ継続的な指導・助言を求めていることが明らかになった。非常に難しいことではあるが、研究授業や研修会等の時だけでなく、日頃から子どもたちや先生方の様子をよく見ておき、実情を把握しておく必要がある。そのためには、組織全体としても大学教員が積極的に学校現場と関わることができるような環境を整備していかなければならない。

また今回の調査は、学校園長及び研究主任（幼稚園は主任）を対象としたものであったが、日々の生活の中で子どもたちとより直接的に関わっている担任の先生等への調査を実施することも必要であると思われる。

大学生等に対しては、同じ人物が継続して支援に参加すること、学校園や子どもたちと積極的に関わり、学校園の実態を理解・把握して支援にあたること、社会人としての最低限度の常識やマナーを身につけておくこと、等を求める声が多かった。ボランティアとはいえ、学校現場に行き子どもたちと向きあう以上、社会人として適切な言動をとることができるよう、大学生等をしっかりと指導していく必要がある。また特別支援教育に対する理解やコミュニケーション能力の向上など、学校支援に参加する大学生等に求められる資質・能力もより高度になることが予想される。本年度発足した「教職コラボレーション部門・スクールボランティアビューロー」が

中心となり、教育行政・学校現場との連携を深めて、デマンドサイドのニーズを全学教職課程の教育に反映させていく必要がある。

#### 参考文献

- 1) 岡山大学教育学部 (2010) 『平成 21 年度 岡山大学教育学部・岡山市教育委員会 連携協力事業研究報告書』
- 2) 文部科学省 (2010) 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
- 3) 文部科学省 (2003) 「今後の特別支援教育の在り方について (最終報告)」
- 4) 朝日新聞社 (2011.1.8) asahi.com 「教員の 1 割, 残業が過労死ライン 月 80 時間超, 愛知県」  
<http://www.asahi.com/national/update/0108/NGY201101080011.html>  
(アクセス日 : 2011.1.11)

---

Title : Cooperation between university and schools: A questionnaire survey

Fumio YAMANE (Center for Teacher Education and Development, Okayama University), Katsuhiko KIDA (Research and Development Center for Educational Practice, Faculty of Education, Okayama University : Predecessor of Center for Teacher Education and Development, Okayama University)

Keywords : cooperation with university, expectations about university, reality of schools

---